

第 11 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「陽炎少年」

京都府 同志社女子高校3年 水田 佳奈



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『陽炎少年』

京都府 同志社女子高等学校三年

水田 佳奈

(あ、飛行機雲。)

優しい陽だまりを感じる五月晴れのある日の午後。ここ、かもめ小学校五年四組の教室では国語の授業が行われている。今年で定年退職を迎えるらしい担任の熊上先生(通称「くまじい」)のおっとりした口調に、ほとんどの生徒が夢の世界へと旅立っているようだ。それを起こすわけでもなく、くまじいは穏やかに授業を進めている。教室窓際一番後ろ、いわゆる「特等席」に座る彼の名は中原佑介。眠気と闘っているわけでも、くまじいの授業を真剣に聴いているわけでもない。彼は、ただ、窓の外を眺めていた。佑介は何でもできた。特別勉強せずとも、テストは毎回九十点以上。クラスで一番足が速くて、学級委員長もやっている。去年のバレンタインでは五人の女の子からチョコを貰ったし、この前なんか市主催の絵画コンクールで入賞した。午前中も体育でドッチボールをした際、佑介の活躍のおかげでチームは勝った。

——ああ、なんかもう、つままない。

彼の小さな心のつぶやきは白い飛行機雲の中に溶けていった。

——キーンコーンコーンコーン。

本日最後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。「起立、礼、さようなら」佑介が号令をかけ、クラスの皆がそれぞれくまじいに「さようなら」と挨拶をすると、くまじいはメガネの奥の優しい瞳で生徒らを見つめ「はい、さようなら」と返事をした。佑介がランドセルを背負うと、前の席の少年から声をかけられた。：何という名前かは思い出せない。

「佑介君！ 今日のドッチはお陰で楽しかったよ！」

「……ごも。」

「今から二回戦やるうってなあって、是非佑介君にも参加して欲しいんだ！」
「あー：俺はいいや。パス。」



佑介は軽く手を上げ、教室を後にした。校門を出たところで二、三人の女子に手をふられたが、佑介は特に関心を示さず無視して帰った。

家に帰って佑介はすぐさま自分のベッドに寝転がった。お母さんの「帰ってきたら手を洗いなさい！」という声が微かに一階から聞こえたが、それも無視。

(つまらない。)

毎日毎日同じことの繰り返し。テストで良い点数をとって、体育で活躍して、学級委員長の仕事をして、男女問わずにもてはやされる。決して悪い気分ではない。だけど、うんざりするのだ。心の中にぽっかり穴が空いた様な、何とも言えない気持ちを抱えていた。佑介は寝転がりながら、正面にある大きな姿鏡で自分を見た。ふてくされた顔をしている。五秒程ぼーっと見つめていると、鏡の中の自分が悪戯いたずらっぽく笑い、ウインクをした。佑介は目を見開いた。自分自身はウインクなどしていかないからである。相変わらずの気の抜けた表情をしていただけなのに。鏡の中の佑介はまた、悪戯いたずらっぽい笑みを見せ、今度は意気揚々とベッドから降りた。そして、こちらに向かってくる。

(来る…、来る！)

佑介は驚きのあまり、言葉を発することも出来ず、ただただ口をパクパクさせるだけだ。そして鏡の中の自分は次第に近づき、ついにはこちらに手を伸ばしてきた。手がニユツと出てきたかと思うと、今度は足、ついには体…と。自分が、鏡から、自分が出てきてしまった。佑介は驚きのあまり、まばたきすることさえ忘れていた。

「やあ。驚いただろ？」

…声まで中原佑介。自分が、話している。間違いない、こいつは鏡の中の自分だ。この悪戯いたずらっぽい笑い方。さっき見た光景と同じだ。

「…お、お前は、俺なのか…？」

震える声で目の前の自分に問いかけると目の前の自分は勿体もったいぶった様な仕草しぐさで説明しだした。自分が自分に話している…とても奇妙な気持ちである。「うーん。正確に言うとは僕は最も君に似た、君じゃ無い人間。なんせ鏡の世界の君だからね。ほら、髪の毛分け方も、ホク口の位置も、左右逆だろ？ちなみに利き腕も逆で虫歯のある歯も逆。」

「ほんとだ…。」



顔も、声も、爪の形さえ、全部自分と同じ…。だけど、自分じゃない。目の前に居るのは、自分とは違う、一人のヒト。

「それで…なんで、出てきたの？」

「そんなの簡単な理由だよ。…だけど、今は教えない。」

「…なんで？」

「ふふふ、内緒。」

突然鏡の中の世界から出てきた自分そっくりな人間。佑介は困惑した頭を抱え、無意識にベッドに寝転がった。

「なあ、お前の名前は？」

「そうだなー。君が佑介なら、僕は佐介…。うん、中原佐介だ。」

「……。」

「今考えたにしては良い名前じゃない？」

佑介はそう言ってニツと笑うと佑介の隣に座った。佑介の生身特有の温もりを近くに感じながら、佑介はだんだん重くなっていくまぶたに身を任せた。

「佑介ー！ ご飯よー！」

お母さんの明るい声で目を覚ました佑介。気がつけば外は真っ暗で夜になっていた。隣には誰も居ない。「なんだ、夢か…」階段を降りながら佑介は思った。本当に奇妙な夢だった。鏡の中から自分が出てくるなんて…。自嘲気味に嘆くと佑介はリビングの扉を開けた。そして目の前の光景に愕然とした。「…何でお前が居るんだ。」

夢だったはずの佑介がダイニングで美味しそうにハンバーグを頬張っていたのである。

「もう、佑介！ 佑介が居るのは当たり前でしょー早く食べちゃいなさい、冷めるから。」

お母さんはそう言って佑介を一喝すると、自分も食卓へとついた。妹のさゆも「佑介兄ちゃんお寝坊さんだねー。」と佑介に笑いかけ、まるで佑介が居る事に違和感がないようだ。佑介はと言うと、さゆの頭を優しく撫でた後、隣にある佑介の席の椅子を引きながら「僕らは双子なんだから、当たり前だから？」とあの顔で笑った。

夕食を食べ終わるや否や、佑介は佐介の腕を引っつかみ自分の部屋に引っ張り込んだ。正直晩ご飯の味など覚えていない。



「な、なんで、お前、と、俺が兄弟、なんだ！」

「その方が都合良いだろ？ 本当の事を知っているのは君と僕だけ。家族も、友達も、近所の人も僕があたかも昔から居た、つまり、佑介の双子の弟中原佐介だと思ってるから。」

「…何でそんな事まで出来るんだよ。」

佐介は何もかも見透かした様に「内緒」と目を細めた。

次の日。佑介と佐介とさゆは一緒に家を出た。普段の佑介ならさゆを置いてさっさと学校へと向かうのだが、佐介が先に出ようとすると佑介を捕まえて「さゆ、一緒に行こう」と声をかけた為だ。通学路、さゆは佐介に手をつないで貰って、嬉しそうに最近習った掛け算の話をしている。佑介はポケットに手をつまみながら二人と少し離れたところを歩いた。学校の敷地に足を踏み入れた所で「あ、佑介君だ。お、おはよう」確か、同じクラスの、宮島？ 宮代？とかいうメガネをかけた大人しそうな少年に話しかけられた。「ああ」佑介の口から出たのは興味なさそうな返事。宮島？ 宮代？は少し息を吐いた後、前方に佐介を見つけたのか直ぐに話しかけに行ってしまった。

「佐介君、お、おはよう！」

「おはよう、宮下君。あれ、この時間に登校なんて珍しいね。」

「そ、そうなんだー実は…。」

(…そうか、あいつは宮下だったのか。)

楽しそうに談笑している二人を見てると何だかもやもやしたモノが込み上げてきて、佑介は自然と歩調を速めた。

佑介の後ろに続く形で佐介と宮下が教室に入ってきた。

「佑介君…あ！ 佐介君だ！ 佐介君おはよう！」

「佐介ー！ 待ってたぜー！」

何だ、何なんだ。皆が寄ってたかって佐介を取り囲んでいる。…宮下は慣れていないのか佐介の後ろでもじもじしているが、それを一瞥いちべつした佐介は

「あ、そうだ！ 皆聞いてよー！ 宮下君ったら今日お母さんとケンカしてさあー…。」

「え、ちよっと！ 佐介君やめてよー！」

「アハハハ宮下君面白いー!!」

「何それ最高ー！」



言葉とは裏腹に、皆の中心で顔を真っ赤にして笑う宮下はすごく嬉しそうだった。

チャイムが鳴る。今日も、面白くない一日が終わった。だが昨日までとは明らかに違った一日になったのも事実だ。間違いない、それは「佐介」の存在だ。佐介は佑介より、全てが優れていた。佑介が九十一点のテストで、佐介は百点。「すごいー！」と褒められても「マグレだよ、マグレ」と言っただけ。徒競走でもクラスで一番のタイムを叩き出したのは佐介の方だった。それだけではなく人望も厚く、休み時間になるとクラスの皆が佐介の席に集まった。佑介は、一人、取り残されたような気分で見ていることしか出来なかった。∴昨日まであの輪の中心に居たのは自分だったのに。

「佐介ー！ 放課後遊ぼうぜー！」

「うん、いいよー！」

「俺も、俺も！」

誰も自分を褒めない。誰も自分を誘わない。

——誰も自分を必要としない。

佑介の心の暗闇が次第に大きくなっていく気がした。

次の日も、次の日も、そのまた次の日も、佑介は独りだった。これまで自らが選んでいた一人ではなく、独りだったのだ。

——孤独。

今の佑介は身を持ってそれを感じた。そうして一週間を過ぎた頃だろうか、また今日も昼休みを告げるチャイムが鳴り、佑介がクラスメイトに引っ張られて行った。前の席の水谷も、つい先日まで同じようにいた宮下も、皆行ってしまった。佐介なんてこちらを振り向くことさえしなかった。人が居なくなってしまった教室は、まるで今の自分だと佑介は感じた。

「∴空っぽ。」

クラスメイトの笑い声がひどく遠くで聞こえた。

——ガラガラガラ

佑介が窓の外を色の無い瞳で眺めていると、突如教室の扉が開いた。入ってきたのは手に鉢植えを持った優しい瞳の老人。くまじいだ。くまじいは、一人ポツンと席に座る佑介に少し驚いた表情を見せたが、すぐさまいつもの様な柔らかな眼差しを向けた。



「やあ、中原君。奇遇ですね。」

くまじいは鉢植えを自分の机の上にそっと置いた。まるでガラス細工を扱うように、優しく、丁寧に。だが、鉢植えには花も咲いていなければ、芽さえ出ていない。そんなに大事な物なのだろうか？

「…それにはどんな花が咲くんですか？」

佑介の口から出た率直な質問に、くまじいは微笑んだ。

「それはですね…。どんな花が咲くのか、実は僕にも分からないんです。」
「えっ。」

くまじいの思いがけない回答に佑介は小さく声を洩らした。

「まだ種ですからね。今の君たちと同じで。…どう育ってくれるかなんて、誰にも分かりません。綺麗な花を咲かせるのか、寂しい花を咲かせるのか…、それは、これからのこの種次第なんです。」

「そして…種は、一人じゃ芽を出す事さえ出来ないんですよ。大人になるには、…花を咲かせるには、それはもうたくさん仲間が必要なんです。土、太陽、水、肥料…これら全てが揃ってやっと、種は一輪の花になれるんです。」
佑介の頬には自然と涙が伝っていた。何か、心に空いていた隙間が、静かに溶け出して佑介を包み込んでいるようだった。溢れ出てきた涙はとめど無く流れていく。くまじいは鉢植えから瞳を逸らさず告げた。

「中原君。…変わりたい、そう思えた時にはもう、君は一步踏み出せてるんですよ。」

「うっ…は、はい。」

涙でグシャグシャな顔を両手で隠しながら佑介は小さく返事をした。変わりたい、今までの自分じゃない、新しい自分になりたい、とそう心から思えた。

「佐介、ちょっと屋根に上ってみないか？」

その日の夜。佑介は佐介を自分のお気に入りの場所へと誘った。佐介は一瞬頭にはてなマークを浮かべたが、面白そうだと思ったのか二つ返事で付いて来た。

「おお！ 結構星見えんだなー！」

「すげーだろ？ まあ、座れよ。」



佑介の合図で佐介は隣に腰を下ろした。だけど二人並んで座るのが何だか急に照れ臭くなってきて、それを隠す様に佑介は屋根の上に大きく寝そべった。今、彼の瞳には無数の星たちが写っている。そして、佑介は覚悟を決めたのか、静かに大きく深呼吸した。

「…俺さ、お前に逢うまでは皆が寄って来るのも、ちやほやされるのも、当たり前だと思ってたんだ。」

「……うん。」

佑介のいつもと違う態度に驚いたのか、佐介は少し戸惑いながら返事をした。

「だけど、いきなりお前が現れて…、皆がどんどん離れていって、自分の居場所が無くなって…：すげえ、寂しかった。…誰にも必要とされてない気がして…：それで、」

佑介はガバツと勢いよく起き上がった。そして佐介の瞳を真っ直ぐ見据えながら、自分の正直な今の気持ち传达了。

「俺、気づいたんだ。皆が俺の事分かってくれないって思ってたけど、それは、逆なんだって。…俺が皆の事を分かうとしてなかったんだって。」

「佐介のお陰で、俺、変わる気がする。…だから佐介、ありがとう。」

無音の時が流れた。まるで世界に二人だけしか存在しないみたいに、静けさが二人を包み込んだ様だった。穏やかな静寂の後、口火を切ったのは佐介だった。

「うん、…役目も終わったみたいだし、僕はそろそろ帰ろうかな。」

放たれた言葉に佑介は固まった。

「え、どういうこと？ 帰るって何!？」

「今の君なら、僕が来た理由も分かるだろ？ …君といるの結構楽しかったよ。」

「やだ、行かないで！」

いつもクールな佑介だけに、自分でもこんな大きな声が出るとは想像してなかった。だが、帰って欲しくないと思うのだ。まだ一緒に居たい、と心が叫ぶのだ。

「俺、お前に教えて貰^{もら}ってばっかで、なんにも返せてないんだよ！ ま、まだまだ一緒にしたい事たくさん有るんだよ！ やっと、やっと…！」



佑介の言葉はそこで途切れた。何故なら、目の前の佑介が見たことも無いような切ない表情をしていたからだ。揺れる瞳からは言葉で言い尽くせない想いが伝わってきた。

「きつと明日の朝になったら、みんな僕のこと忘れちゃってると思うんだ。でもね、これだけは覚えておいて。僕たちが過ごした日々は本当にあった。夢なんかじゃないんだ。」

「でも、」

未だ納得できない佑介に佐介は念を押すように続けた。

「…大丈夫。君が僕を忘れない限り、僕はいつでも君の…佑介の心の中に居るから。」

佐介が屈託なく無邪気に微笑み、トン、と指先で佑介のおでこを弾いた。すると佑介はおまじないにかかったかのように、そのままゆっくりと後方に意識を手放した。——薄れゆく意識の中、佑介が最後に聞いた佐介の声は「さよなら」ではなく「ありがとう」だった。

あくる日の朝、佑介はベッドで目を覚ました。昨日まで隣に感じていた「彼の温もりはもうどこにも無い。本当に、帰ってしまったのだ。目を背けたい現実が佑介を襲った。着替え、朝食をとり、歯を磨き、学校へ行く支度を整える。何も変わらない日常。「彼」が来る前の、何でもない元の生活に戻っただけだ。だが一つ違うものがそこにはあった。

「おい、さゆー。早くしないと学校置いてくぞ。」

「え！ まってー！ お兄ちゃんといっしょにいくー！」

佑介は妹の小さな手を握りながら思った。今日は、自分から皆のもとに歩もう。くまじいにも、ちゃんとお礼を言おう。これから仲間を、人を、大切にしよう。

(あ、飛行機雲)

見上げた鮮やかな蒼い空が眩しくて、今日という一日に何だかわくわくして、佑介は思わず目を細めた。

同時に、どこかで佐介が満足そうに笑っている気がした。